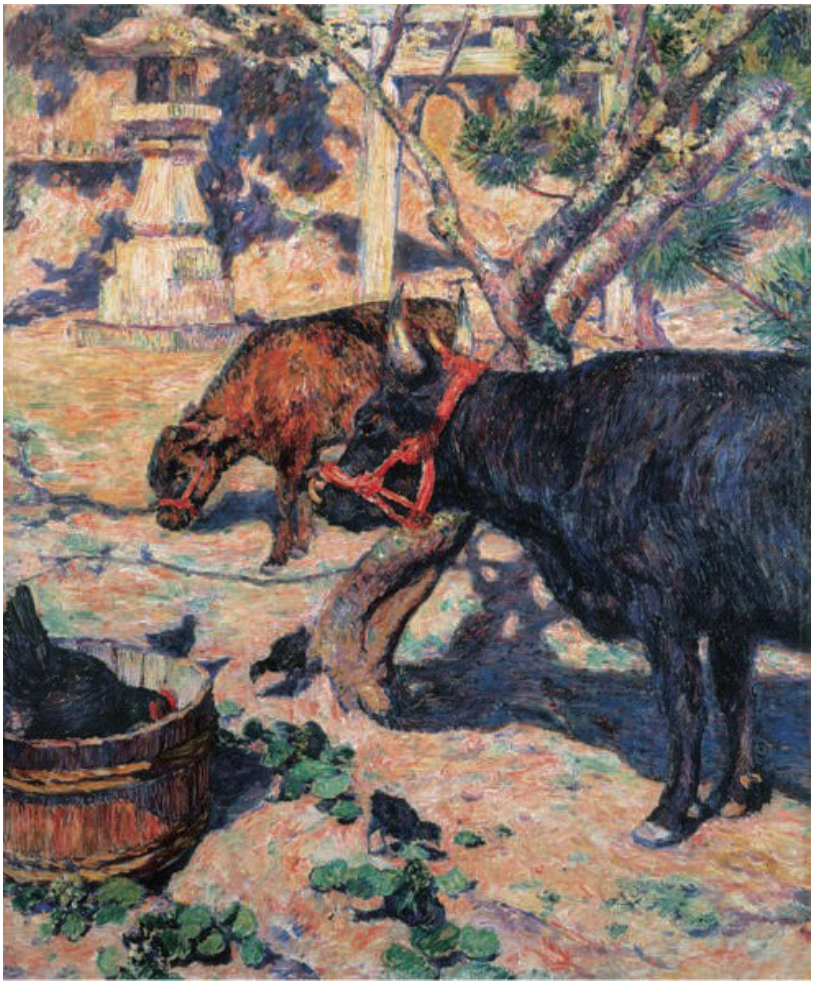
NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館だより

NO.38◆2022.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
https://nariwa-museum.or.jp/



児島虎次郎
《親牛仔牛》
1916年 油彩・画布

美の世界を拓く　千住博

2021年4月3日[土]―7月24日[土]

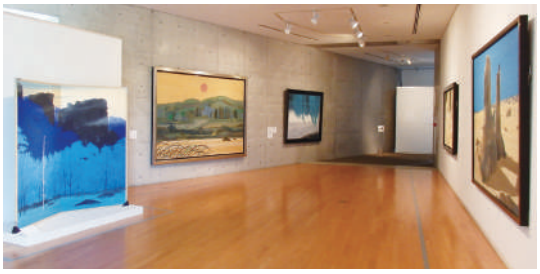
展覧会チラシ
2種をつなげると《ウォーターフォール》が完成する

十数年前になるかと思いますが、軽井沢で千住先生にお目にかかり成羽美術館での展覧会をお願いしてから長年の想いが叶い、やっと展覧会を開く事が出来ました。開会式は4月3日(土)、奇しくもこの日は当館が顕彰する児島虎次郎の誕生日でした。ありがたいことには、開会式の前月に千住先生が日本芸術院賞恩賜賞を受賞され、NHKスペシャルなどで特集番組が放送されました。そうしたお目出度い雰囲気の中での開会式でしたが、先生はNY在住でコロナ禍のため帰国できずメッセージを寄せられました。

展示内容は、東京藝術大学在学中や卒業後の初期作品から代表作〝滝〟シリーズ、そして近作までの約40点、大作が多く見ごたえのある内容でした。初期の〝ビル〟シリーズの作品などからは、千住の一貫したテーマともいえる『時のうつろい』が見て取れます。「ジ・エンド・オブ・ザ・ドリーム」や茶祖 千利休の菩提寺である大徳寺聚光院の襖絵に描いた砂漠のシリーズ「月響」からは、環境破壊に対する千住の危惧が感じ取れます。美の祭典ヴェネツィア・ビエンナーレへの推薦契機となり、NYのアートシーンで高い評価を得た「フラットウォーター」の大作、そして千住最大の魅力あふれる代表作「四季滝図」が並ぶ2階展示室では、静かな滝の音が聞こえてきそうな静けさの中で、瞑想にふけるかのような姿で佇む多くの方々を見る事が出来ました。階下に降りて右、オリエント展示室のいつものガラス面を壁で覆い、真っ暗な中で8色の滝が流れ落ちる動画の展示を見て、1階展示室の最後には最新作〝崖〟シリーズの作品数点がそれまでの作品とは違った感動を観る人に与えます。世界遺産の高野山金剛峯寺へ奉納された襖絵に描かれた〝崖〟の連作であるこれらの作品は、鳥の子紙という肉厚な和紙を縦横に揉み、でこぼこした岩肌をつくり、そこに岩絵の具を流し、筆で描き、こすり、スプレーし、悪戦苦闘の末、崖が徐々に現れます。まさに「岩からできた絵具で岩を描く」方法で千住博の絵画に日本画の新しい可能性を見る事が出来ます。

本展では、初めて展示にLED照明を導入しました。千住の絵の美しさ、特に岩絵の具の輝きと胡粉と墨の美しさを十分に引き出し、ご覧になる方に味わっていただけたのではないかと思います。アンケートには「心が洗われるようだ」「こと2～3年の災害に打ちひしがれた気持ちが、この作品たちを見てガンバレルと思いました」などと絵に対する感動と共に現代的な安藤忠雄建築とのコラボレーションに魅了されたとの声が多く綴られていました。会期中に緊急事態宣言が発出され長期間の休館があり、山下裕二氏の記念講演会以外のイベントがすべて延期と中止になる中、1万人を超える来館者を得たことはまさに千住芸術の素晴らしさ故と思いました。

館長　澤原一志



初期作品が並ぶ会場風景

「四季滝図」より 夏(左) 春(右)

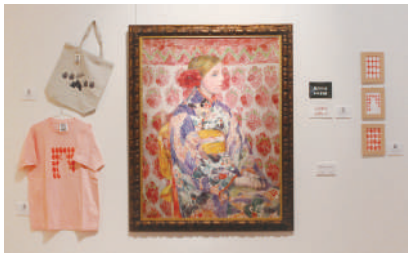
4月18日(日) 記念講演会
山下裕二氏(美術評論家・明治学院大学文学部芸術学科教授)

岡山県立大学コラボ記念特別展示
「サロン・ド・虎次郎」
2021年8月7日[土]―8月29日[日]

毎年恒例の岡山県立大学デザイン学部とのミュージアムグッズ共同開発プロジェクト。第8回目となる2021年は児島虎次郎生誕140年という記念の年でもあり、虎次郎をテーマにグッズ開発を行いました。さらにグッズの販売だけでなく、企画展「サロン・ド・虎次郎」として展示にもチャレンジ。完成したグッズとともに、モチーフとなった虎次郎作品や彼が収集した美術品を実際に横に並べ、比較展示するという新しい試みです。当初は販売も同時に行う予定でしたが、昨年度に引き続きコロナ禍で制作を中断せざるを得ず、販売のみ9月に延期に。しかし展示用のグッズは無事完成、公開の運びとなりました。《登校》など若いころの作品から《鸚鵡と少女》など晩年の作品、そして古代エジプトの美術品に至るまでさまざまなものがモチーフとなりました。なかには絵画の中の「人物が手に持っている物」「背景の壁の文様」や「家具の文様」など作品の主役ではない部分もグッズ化され、来館者は県大生の目の付け所自体も楽しんでくださったことでしょう。100年前の画家の作品と、現代の若者の視点でアレンジされたグッズの対比は大変興味深いものとなりました。そのほか、過去7回分のコラボグッズも一堂に展示、岡山県立大学との歩みや開発過程なども皆様に見ていただくことができました。

次年度はプロジェクトの原点にもどり、〝成羽の化石〟をテーマに予定しています。どうぞご期待ください！

会場風景


オリジナルグッズとモチーフの
作品《和服を着たベルギーの少女》

過去のコラボグッズたちが並ぶ会場
学生さんたちのアイディアは実に多彩！

福武教育文化振興財団助成活動
「なんで成羽でエジプトなん？」プロジェクト始動！

成羽が誇る洋画家 児島虎次郎が、実は古代エジプトの美術品を収集していたことはあまり知られていません。1900年代初頭に集められた古代エジプト資料は大変貴重なものであり、当館にも200点近く所蔵されています。

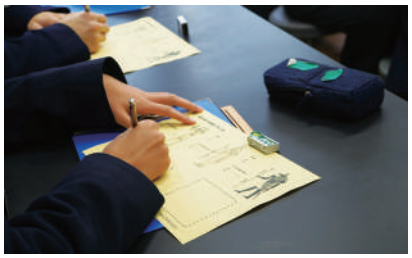
そのような貴重な資料の存在を皆さんに知っていただき、あらためて郷土の誇りとしてご理解いただくため、「なんで成羽でエジプトなん？」というチームを結成しました。実は昨年度から始動する予定で福武教育文化振興財団より助成を受けていたのですが、コロナ禍で断念していました。しかし2021年12月、宇治高校・小学校の協力により実現することができたのです。メンバーには当館スタッフだけでなく、東京・古代オリエント博物館研究員や岡山県立大学の先生なども在籍してくださり、さまざまな角度から虎次郎のコレクションを語ることができます。資料の実物を学校にお持ちすることはできないので、精巧なレプリカをつくり、実際に子供たちが手に取って観察することができるようにしました。虎次郎がどんな思いで古代エジプトの美術品を収集したのか、コレクションにどんな意味があるのかを学びながら、古代エジプトの文化や芸術に直接触れることができます。子どもたちも古代エジプトの神様や埋葬品に興味津々でした。

今後も、出前授業という形でさまざまな学校にお邪魔したいと考えており、ご希望の学校を募集しています。ぜひお気軽にお声がけください！

シャブティ（実物）

（レプリカ）

出前授業風景 宇治高校にて


ワークシートで
エジプトの神様について学ぶ

江戸庶民の美
大津絵と浮世絵版画―幻の東海道五拾三次―

2021年9月11日[土]―12月19日[日]

展覧会ポスター

新型コロナウイルスにより不自由な毎日を余儀なくされている私たちですが、同じように江戸時代の庶民もコレラの蔓延、度重なる地震や津波による被害、あるいは火事など多くの災害に悩まされてきました。しかし、江戸の庶民はそのような災禍にもかかわらず日々を活き活きとたくましく生きています。

本展では、大津絵や浮世絵版画から江戸庶民の美意識を探り活き活きとした江戸の姿に迫りました。展示の大津絵35点は、画家の小絲源太郎（1887―1978）が所蔵していたもので、数年前に発見され国内でもわずかに数か所で発表されただけの大変珍しいものです。小絲が手に入れる前には画家の梅原龍三郎や富岡鉄斎が愛蔵しており、それらの名品には肉筆浮世絵とは違った職人の自由で達者な筆さばきと当時の世相への風刺と諧謔が見られます。

一方、浮世絵師 歌川広重が描く「東海道五拾三次」は、よく知られている保永堂版ではなく、現存数の少ない『幻の東海道五拾三次』と言われた丸清版をご覧いただきました。展示にはこの版画と共に、大正年間に撮影された現地写真と現在の風景を見比べられるように並べて、昔の宿場町の面影がそのままの所もあれば、昔の風情のほとんど見られない場所もあり、広重が描いた風物を偲ぶ楽しさを味わうとともに時代の流れと変化を感じていただきました。

会場風景

11月14日（日）備中神楽公演

子どもたちの凛々しい舞に
会場全体が引き込まれました

12月11日（土）ワークショップ
「顔（かお）スタンプ・いろんな表情を作ろう」

描かれた宿場の人々の姿からは、江戸の楽しげな人情味のある生活ぶりが感じ取れました。

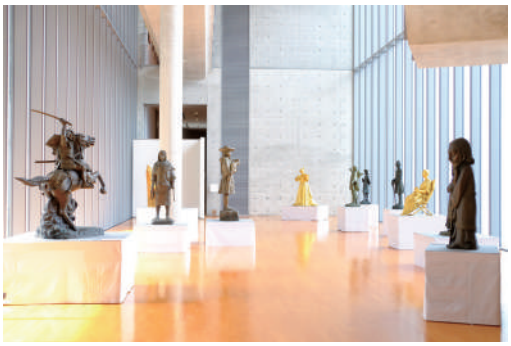
また、私たちが今ではほんの数時間で行き来できる東京と京都間の旅は、この時代の人にとっては一生のうちに一度かもしれない長旅であり、それも徒歩でゆっくりと旅するのは不便さと共に、ある面では豊かさを持っていたのではないかと考えさせられます。宿場を一つひとつ巡るうちに出会う人との交わりや人情、それぞれの場所の風景や土地の風物を楽しみながら、この時代の人々の方が実に豊かに生きていたのではないかと感じさせられました。

会期中のイベントのうち、コロナ禍のため落語公演は中止、美術館初の備中神楽公演は時期を変更して隣接のたいこまるプラザで大人神楽とこども神楽を演じていただき、多くの方に好評でした。また、顔スタンプを作るワークショップも関崎哲講師（岡山県立大学デザイン学部教授）によりレクチャールームで実施し、制作を楽しんでいただきました。

アンケートへの回答を見ると、大津絵をこの展覧会で初めて知った方が多く、大津絵のユーモラスで可愛らしい画面と職人技のクオリティの高さに驚いた声が綴られ、江戸の庶民芸術の魅力を味わえたと好評でした。

来館者数は当初の予想を上回り6，000人を超え、中高年層だけでなく若者にも大津絵や浮世絵の魅力が伝わっていきつつあるのではないかと、改めて日本文化の底力を感じました。展覧会の会期中には美術館入館者数累計60万人を達成し、記念のセレモニーを行うとともに、さらに多くの方に喜んでご覧いただける企画をと決意を新たにしました。

高梁市・高梁市教育委員会主催
受贈記念 富永直樹展
2021年10月5日[火]―10月24日[日]


会場風景

本展は、高梁市が彫刻家 富永直樹氏（1913―2006）のブロンズ彫刻を受贈したことを記念し、高梁市・高梁市教育委員会の主催により、多目的展示室にて開催されました。これには、当館の児嶋塊太郎理事長の仲立ちで、市が兵庫県の大洋精機㈱代表取締役 髙橋淳氏から寄贈を受けるに至ったという経緯があります。展覧会では、受贈作品全12点をご紹介し、市内外から多くの方にご来場いただきました。

富永直樹氏は、日展を主な舞台として作品を発表し、戦後の日本彫刻界を牽引した作家の一人です。日本芸術院会員、日展理事長等を歴任し、多くの後進を育成するとともに、晩年には文化勲章を受章。名実ともに日本を代表する彫刻家として長きにわたり活躍しました。

富永氏の生涯の作品を通覧するとき、そのテーマやモチーフ、スタイルは多彩な変遷を見せますが、多くが着衣像であることは一つの特色と言えるでしょう。氏が好んだ異国の装飾的なコスチュームは造形に多様な広がりを生み、裸婦像が主流であった日展の彫刻部門において新境地を切り開きました。

この度の受贈作品は、いずれも1970年代後半以降、言うなれば氏の円熟期に制作されたもので、等身大よりは小さなサイズではありますが、一点一点に高い技量が発揮されています。堅実な写実の中にやさしさを込めた穏健な作風は、多くの方に親しみを持ってご鑑賞いただけたのではないでしょうか。高梁市は今後、市内の文化施設等に常設で展示するよう検討しているとのことです。

《クリスマスイヴ》1989年

児島虎次郎を偲ぶ 絵画コンクール
2022年1月7日[金]―2月6日[日]

成羽中学校2年 鈴村俐奈さんの作品
《吹屋とボンネットバス》

令和3年度は、市内小中学校21校から1,181点の応募がありました。今年度も学校行事やふるさとの風景、ペットなど様々なテーマで描かれた個性豊かな作品が集まりました。審査を経て各学年の最優秀賞にあたる「児島賞」、次点の「渡辺賞」などの受賞作品を含む190点が選出され、多目的展示室に並びました。1月13日（木）に表彰式を開催し、受賞者には高梁市教育委員会小田幸伸教育長より賞状と記念品が贈られました。また、昨年度に引き続き洋画家で児島虎次郎の曽孫である児島慎太郎氏が各作品の講評を行い、受賞者は熱心に耳を傾けていました。

児島賞・渡辺賞受賞者は次の通りです。（敬称略）

【児島賞】
二瀬瑛介（川上小1年）、西田博一（落合小2年）、黒川創真（成羽小3年）、沼田愛生（川上小4年）、丸山千尋（落合小5年）、佐藤淳哉（福地小6年）、太田結心（成羽中1年）、鈴村俐奈（成羽中2年）、榎千智（川上中3年）

【渡辺賞】
吉川明里（成羽小1年）、松森汰一（津川小2年）、井上彩（津川小3年）、山本彩乃（玉川小4年）、川村虎生（成羽小5年）、羽賀陽詩（高梁小6年）、三村奈津美（成羽中1年）、池田愛子（川上中2年）、宮田萌恵（高梁中3年）

1月13日（木）表彰式

令和3年度次世代おかやまアーティスト活動促進事業

金孝妍「息する瞳 ―Breasphere―」

2022年1月5日［水］―3月21日［月・祝］

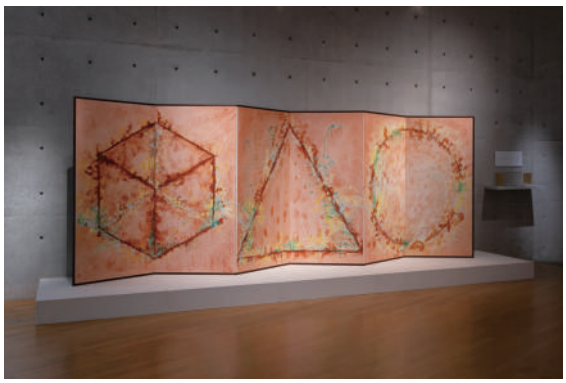
高梁市成羽美術館で展示をすることが決まった時から、安藤忠雄氏建築の空間はずっと頭の中に居座り、作品は生まれていった。

美術館の周りからは川が見えない。しかし、館内には「流水の庭」と「静水の庭」があり高梁市の自然をギュッと凝縮させた空間に思える。そこには鳥の声も水の音も風や光の揺らぎも建物と共に息するように佇んでいる。この空間に差し込む光や影、静水を動かす風、反射する水面とガラスのように、私の作品も、クボタケシさんの作品も、空間と一緒に息をしたいと思ったのである。

「息する瞳 ―Breasphere―」というタイトルも、普段の作品作りに対する姿勢から決めたものである。それは、息することで生きていられる私達は、地球の空気を動物も植物もみんなで共有していることをはじめ、何事も何らかの形で全て関係していることを意識している。

触れるものを、瞳に映るものだけに終わらせず、息するように感じて、感じ返すことの循環を意識していきたいと思う。だから、吐く息にも心を込めて、場所や物と呼応するようにこれからも生み出して行こうと思う。

金孝妍



1

4

3

2

1.《再生(Rebirth)》
2.《息花 ―息が留まるところ―》
3.《素材と絵の間 ―自画像―》
4.《星が生まれる前の星に》
―金孝妍×クボタケシ コラボレーション空間
Photo by 青地大輔

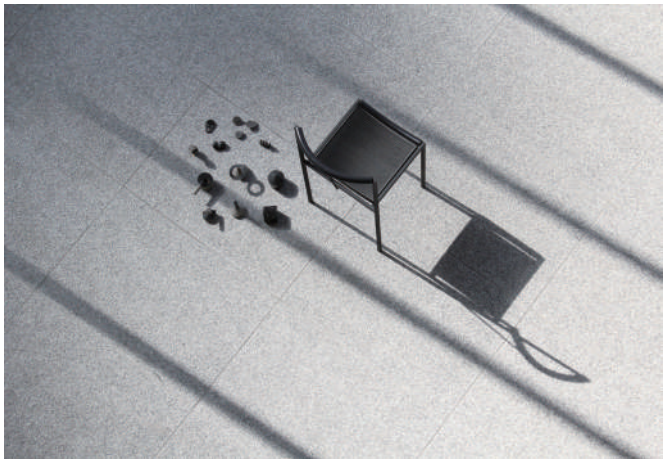
岡山県ゆかりの若手アーティストをご紹介する本企画は、今年度で3回目を迎えました。今回は美術家 金孝妍さんと彫刻家 クボタケシさんの作品展。当館で展示するにあたり、現地調査や研究も含め、約半年をかけて準備に当たっていただきました。

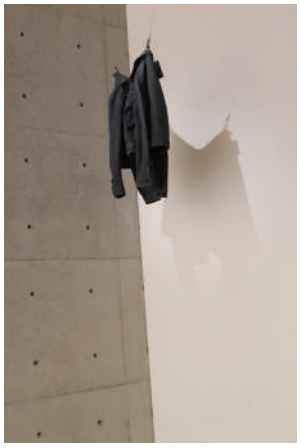
金さんは制作する過程そのものを〝作品〟と捉えている作家です。本展では、現在では生産されていない幻の〝成羽産〟ベンガラの再生を自ら行い、それを用いた六曲一双の屏風や、キャンバスを自身の顔に当て、その際浮かび上がる凹凸を、キャンバスの四方に置いていた油絵具を用い指でなぞった作品等、表現豊かな10点を展示。クボさんはトラバーチンなどの石素材の個性を活かした、可愛らしくどこか毒のある、まるで妖精の玩具のような繊細で小さな彫刻群、また彼自身のコレクションを使い、空間全体を作品にしたインスタレーション、そして以前より石の魅力を広めたいと相談を受けていた、足立石灰工業株式会社から提供された石灰石で制作した新作彫刻など、100点以上の作品を展示しました。

お二人の作品は所謂〝抽象〟なので、来館者からは「分からない！」と困惑の声が多少上がったのも事実ですが、本展はあえて説明等を最小限に留め、鑑賞者に読み解きを委ねるようにしました。鑑賞者が作品と向き合おうとする熱量が強ければ強い程、おのずと

令和3年度次世代おかやまアーティスト活動促進事業
クボタケシ「RIOT」
2022年1月5日［水］―3月21日［月・祝］

安藤忠雄建築は楽しく美しくそして、神聖だとおもう。水、コンクリート、ガラス、光影、すべてのバランスがそうさせている。だからそこに作品を置くと美しさがなくなってしまうのでは？とおもった。空気と時間の作品だとおもった。だから、不安がいっぱい押し寄せてきた。その反面ではワクワク、ドキドキしていたりした。なぜなら、安藤忠雄建築には神様が宿る場所があるとボクは常々おもっていた。何故神様が…と言うと、その場所に作品を置くと全ての作品が輝いて素敵に思える隙間があった。そして、作品を置くというよりは空間に寄り添うようにしたいとおもった。たとえば、広い空間はそのままに、潜る、佇むようにそこにあったかのようにしたかった。だから作品を探す展覧会にしたかった。シンプルなジャングルをつくりたかった。そして、探しているとそれぞれがつながり問いかけとしての物語がつくられていく。その答えに応えられるのは好奇心をいだいて冒険者となった見る側の人だとおもう。だから、その人たちに感謝したいとおもう。答えのない、作品たちに答えを与えてくれて…　クボタケシ





作品が語り掛けてくる、そんな仕掛けの展覧会にしたかったからです。「そもそも〝作品とは〟と考えさせられた」「分らないから、かえって作品を凝視してしまった」「いつもと違った視点で美術館体験ができた」とのお声も、同時に沢山いただくことができました。

今日、ある事柄に対する良し悪しの反応量が、SNSの「イイネ」機能等で明確に見えるようになりました。そのため、不特定かつ多数派の意見が尊重されるようになり、かえって本来多様であるべき価値の種類が縮小し、解りやすく受け入れ易いものばかりが溢れはじめている面もあります。解りやすさとはありがたいものですが、解りにくさを理解しようとする行為もまた、味わい深く、良いものではないでしょうか。アート作品には必ずそこに関わった作家＝人が存在します。ひとりの人を理解することがどれ程難しいか、誰しも経験があるように、ひとつの作品を読み解くことも同様、時間のかかる行為になります。また、〝理解する〟ためにはまず〝受容する〟ことが必要となります。目の前の作品をじっくりと受け入れ理解しようとした時、自分自身との思わぬ共通点を発見して驚いた、という経験を、本展で得た方が居れば幸いです。

本展開催に際しまして、ご協力賜りました沢山の方々へ、この場を借りて心より御礼申し上げます。

コロナ禍でさらに充実!! おうちミュージアム

昨年度に引き続き新型コロナウイルスの影響により、成羽美術館は千住博展会期中の5月16日～6月9日の期間を臨時休館、6月10日～20日は高梁市民限定で開館という措置をとりました。その後8月にも再び緊急事態宣言が発出され、岡山県立大学とのコラボ記念特別展示「サロン・ド・虎次郎」の閉幕を目前にして臨時休館が決定。休館期間は秋の特別展「大津絵と浮世絵版画」会期にも重なり、開幕を3日遅らせることになりました。他にも特別展の関連イベントを中止・延期するなど、今年度もやはりコロナに翻弄された一年でした。

なかなかいつも通りの活動ができない中、昨年度立ち上げたオンラインコンテンツ「おうちミュージアム」が今年度はさらに進化を遂げます。おうちにいながらパソコン・スマホで成羽美術館の展覧会が覗けちゃうという大盤振る舞いなサービス「オンライン美術館」を期間限定公開しました。今年度開催の千住博展、サロン・ド・虎次郎展、大津絵と浮世絵版画展、そして金孝妍展・クボタケシ展まで3D撮影を行い、実際に館内を巡るかのようにWeb上で成羽美術館を体験していただきました。オンライン美術館を通じて、成羽美術館に行ってみたいという方が少しでも増えたなら幸いです。

今後もオンラインコンテンツの充実をゆるやかに目指していきますので、気長にお付き合いくださいね。

オンラインで美術館を楽しめる！

おうちミュージアム

SNSで発信中！ #成羽のいきものずかん

成羽美術館のすぐ横には山の斜面が迫り、そこはたくさんのいきものたちの住処になっています。この自然も魅力のひとつとして皆様にお知らせするべく、成羽美術館では「#成羽のいきものずかん」というハッシュタグを作成。周辺で見られる小さないきものたちの様子をSNSで発信しています。なかでも多く投稿しているのが「野鳥」。成羽は四季を通してたくさんの野鳥が見られるところなのです。その種類は多様で、一年を通して見られるシジュウカラやセキレイにエナガ、春にはウグイス、夏は渡り鳥のキビタキ、秋には燕、冬はジョウビタキやルリビタキなど。また、流水の庭にはカワセミが姿を見せることも。カワセミは鮮やかなコバルトブルーと橙色の羽根を持つたいへん美しい鳥です。つがいでたびたび姿を現し、水の中に飛び込んで獲物を取る様子も見ることが出来ました。この鳥はその羽根色から「空飛ぶ宝石」とたとえられることがありますが、池のほとりに留まり水面にきらきらと青い影が映り込む様は、まさに翡翠のようでした。

今回ご紹介した以外にも、成羽にはまだまだたくさんの魅力的ないきものたちがいます。「#成羽のいきものずかん」はこれからも不定期で発信していく予定です。どうぞお楽しみに！

カワセミ

キセキレイ

シジュウカラ

キビタキ

エナガ

ジョウビタキ

おもにインスタに登場してるよ
よかったら ピヨ フォローして

表紙解説

《親牛仔牛》児島虎次郎

1916年　油彩・画布

児島邸宅の庭に親牛と仔牛を放ち、モチーフとした作。太陽の光が艶やかな牛の毛並みをなぞり、強い影を落としている情景が表現豊かに描かれています。影を辿っていくと、ふと可愛らしい3羽のひな鳥の存在にも気づく、楽しい作品。

灯篭や鳥居はチューブから直接キャンバスへ塗り付けたかのように描かれていたり、松の葉は大胆なハッチングで表現されていたりと、実に多様な手法で制作されています。地面など、全体に色数を多く使用しているにも関わらず、まとまりのある画面に仕上がっており、この時期の秀作といえる一枚です。

主役である黒牛が大胆に切り取られた構図になっていますが、これは児島が作品を完成させた後、木枠から外してキャンバスを切り現在の形にトリミングしたものです。光り輝く画面からは、純粋に描くことを楽しむ児島の様子も伝わってくるかのようです。